

日本のことわざの認知度について¹⁾

鄭 芝 淑

1. はじめに

筆者は2004年に日本と韓国のことわざがどの程度知られているかを調査したことがある。日本と韓国で1980年以降に出版された小・中規模のことわざ辞典調査によって得られた日本と韓国のPSリストに基づきそれぞれ25件のことわざを選定し、後半部補充式アンケート法を用いてそれらの認知度を調査した。その目的は、日本と韓国においてことわざの認知度に世代差や性差があるか、日本と韓国の間でことわざの認知度に違いがあるかを明らかにし、また、レベル別の認知度の違いを調査することによりことわざ比較の方法論的道具立てとしてのPSリストの有効性を確かめることであった。しかし、調査の設計に次に挙げるような不備があったために、調査結果から十分に信頼できる結論を導き出すことができなかった。

- ① PSリストの異形処理が不十分であったために、ことわざのレベル区分が不適切な面があった。
- ② 日韓共に複数回答が可能なことわざが含まれていたために、結果の分析対象からはずさざるを得なかった。
- ③ 後半部補充式という回答方法を採用し、さらに共感度テストと同時に行ったために、調査対象とすることわざを25件(5段階区分で各レベル5件ずつ)と少数に絞らざるを得なかった。そのため①、②の不備によりレベル別の認知度の分析が大きく信頼性を欠くことになった。
- ④ 一組の調査対象ことわざ群しか準備しなかったため、対象の選択の仕方によって結果に差が出るかどうかを確かめることができなかった。

以上の不備点の反省に基づいて、今回改めて、日本のことわざだけに関して、修正された方法によりことわざ認知度の再調査を行った。

2. 調査の概要

(1) 調査様式

前回の調査では後半部補充式のアンケート調査法を用いたが、今回の調査では一語補充式の回答方法を採用することにした。調査対象とすることわざの適当な一語を空白にしておき、これを埋めるという回答法である。これは、前回の調査に用いた後半部補充式回答法では正答か誤答かの判定が困難な場合があり部分点を与えるという措置を採ら

ざるを得なかったが、一語補充式では正答・誤答の区別が明確であろうと思われたことと、調査の精度を高めるため調査対象とすることわざの件数を増やしたかったことによるものである。

また、調査対象とすることわざ群の選択が調査結果にどの程度影響するかを見るために、同一の手順で選ばれた2つのセットのことわざ群を調査対象として準備することにした。

(2) ことわざの選択

調査対象とすることわざの選択は、異形処理を徹底させた鄭芝淑(2007)のPSリスト Ver.2006(日本版)により行い、選択に際して恣意性の入らないように慎重に配慮した。前回の調査ではPSリストの上位1,500件までを5つのレベルに区分したが、調査結果の分析により1,000位以上のレベルではあえて細区分をする必要はないことが明らかになったため、今回は4段階のレベル区分とした。新旧のレベル区分の違いは次の表の通りである。

表1：レベル区分の新旧対照

	前回の調査	今回の調査
レベル1	上位100件程度	PSリストの最上位
レベル2	次の300件程度	200位程度
レベル3	次の300件程度	500位程度
レベル4	次の400件程度	1,000位程度
レベル5	次の500件程度	

日本版PSリストにおける度数順のことわざ件数分布は次の通りである。

表2：度数順のことわざ件数分布

度数	件数	累計	度数	件数	累計	度数	件数	累計
43	7	7	33	34	289	23	59	680
42	25	32	32	26	315	22	73	753
41	31	63	31	29	344	21	64	817
40	20	83	30	31	375	20	82	899
39	22	105	29	32	407	19	75	974
38	19	124	28	42	449	18	109	1,083
37	29	153	27	29	478	17	125	1,208
36	25	178	26	34	512	16	115	1,323
35	41	219	25	46	558	15	120	1,443
34	36	255	24	63	621	14	107	1,550

前回の調査では、レベル1については度数最上位のものから調査対象を選んだが、他のレベルについてはそれぞれのレベルの中間に位置する度数のものから選んだ。今回の

調査ではどのレベルについてもそれぞれの度数最上位のものから選ぶこととした。具体的には、度数 43～41（レベル 1）、度数 34～33（レベル 2）、度数 25～24（レベル 3）、度数 17～16（レベル 4）の中から選んだ。

調査対象とすることわざの数を各レベルから 15 件ずつ計 60 件とし、A、B 2 つのセットを作成することにした。まず、上のレベル区分に該当することわざの中から調査目的に適することわざを各レベルから 30 件ずつ選んだ。調査目的に適することわざとは、複数回答の可能性がないもの、補充されるべき語が前後の文脈から推測できないもの、内容的、語彙的に社会的規範に照らして差しさわりのないもの、ということである。また、漢字の成句や純然たる慣用句のようなことわざらしくない表現も省いた。選択されたことわざは後掲表 4、5 の通りである。

選ばれた各レベル 30 件のことわざを 15 件ずつ A、B 2 つのセットに分けた。分け方は、原則として PS リストの配列順に従って交互に振り分けることにした。ただし、その結果同じセットに組み込まれることで回答のヒントになるなど何らかの不都合があると判断された場合には適宜入れ替えた。

各セットの調査項目を第 2 文節の字母順に配列し、さらに、調査項目の配列順が回答結果に影響を及ぼすかもしれないので、それぞれのセットについて配列順を変えた 3 種類の調査用紙を作成し、調査の際に同数ずつ使うように配慮した。

(3) 調査時期と回答者

調査は 2008 年 5 月～7 月の期間に名古屋で行った。回答者を「中学生」「高校生」「大学生」「学生以外（49 歳以下）」「学生以外（50 歳以上）」の 5 通りの年齢層に区分し、それぞれの区分毎に 50 名程度の回答者を得ることを目標とした。回答者数は表 3 の通りである。

表 3：回答者数

区 分	タイプ A	タイプ B	全体
中学生	60	59	119
高校生	58	58	116
大学生	55	52	107
～49	74	46	120
50～	57	60	117
計	304	275	579

なお、A、B セットの重複回答者はいない。

3. 調査結果

各調査項目の正答を 1 点として集計した。前回の調査では 0.5 点という採点も行ったが、

今回は1点か0点のどちらかに振り分けた。

各調査項目の年齢層別および回答者全体の正答率は次の表4、5の通りである。

表4：調査項目別正答率【セットA】

ことわざ	L	度数	中学	高校	大学	～49	50～	全体
犬も歩けば（棒）に当たる	1	43	98.3	98.3	100	100	100	99.3
縁の下の（力）持ち	1	42	98.3	98.3	98.2	98.6	98.2	98.4
灯台（下）暗し	1	41	95.0	96.6	100	97.3	98.2	97.4
石の上にも（三年）	1	42	98.3	96.6	94.5	98.6	96.5	97.0
可愛い子には（旅）をさせよ	1	42	98.3	98.3	98.2	95.9	96.5	96.4
百聞は（一見）に如かず	1	42	91.7	100	100	90.5	96.5	95.4
弘法にも（筆）の誤り	1	42	93.3	91.4	87.3	90.5	98.2	92.1
仏の（顔）も三度	1	42	93.3	96.6	89.1	78.4	86.0	88.2
取らぬ（狸）の皮算用	1	41	91.7	81.0	89.1	83.8	91.2	87.2
転ばぬ先の（杖）	1	42	81.7	70.7	78.2	85.1	93.0	81.9
亀の甲より（年）の功	1	41	75.0	81.0	81.8	78.4	89.5	80.9
人の（噂）も七十五日	1	42	66.7	67.2	61.8	86.5	96.5	76.3
暖簾に（腕）押し	1	41	73.3	72.4	72.7	59.5	82.5	71.4
柳の下にいつも（泥鰌）はいない	1	41	21.7	10.3	14.5	33.8	75.4	31.3
船頭多くして（舟）山へ登る	1	41	23.3	34.5	16.4	28.4	52.6	30.9
鳶が（鷹）を生む	2	34	93.3	84.5	96.4	94.6	98.2	93.4
目の上の（瘤）	2	34	61.7	87.9	87.3	97.3	98.2	86.8
生みの親より（育て）の親	2	33	55.0	89.7	87.3	89.2	98.2	83.9
桃栗三年（柿）八年	2	34	63.3	70.7	85.5	94.6	98.2	82.9
鴨が（葱）を背負ってくる	2	33	43.3	67.2	74.5	74.3	87.7	69.4
芸は（身）を助ける	2	34	48.3	46.6	49.1	78.4	96.5	64.5
可愛さ余って憎さが（百倍）	2	33	31.7	37.9	45.5	85.1	93.0	59.9
少年老い易く（学）成り難し	2	34	11.7	39.7	41.8	51.4	75.4	44.1
生き馬の（目）を抜く	2	33	15.0	13.8	10.9	39.2	75.4	31.3
鬼も十八（番茶）も出花	2	34	0.0	5.2	5.5	31.1	93.0	27.0
李下に（冠）を正さず	2	34	10.0	15.5	12.7	27.0	50.9	23.4
物言えば（唇）寒し秋の風	2	33	0.0	1.7	5.5	17.6	61.4	17.1
羹に懲りて（膾）を吹く	2	33	5.0	10.3	0.0	20.3	26.3	12.8
身を捨ててこそ浮かぶ（瀬）もあれ	2	33	1.7	12.1	1.8	10.8	26.3	10.5
足下から（鳥）が立つ	2	34	8.3	1.7	0.0	4.1	15.8	5.9
勝負は（時）の運	3	24	45.0	75.9	81.8	82.4	98.2	76.6
夫婦喧嘩は（犬）も食わぬ	3	24	28.3	34.5	32.7	87.8	93.0	56.9
歯に（衣）着せぬ	3	25	25.0	43.1	40.0	62.2	77.2	50.0
腹も（身）の内	3	25	10.0	6.9	9.1	35.1	77.2	28.0
権兵衛が種まきや（鳥）がほじくる	3	24	3.3	8.6	1.8	37.8	77.2	26.3
石に漱ぎ（流れ）に枕す	3	24	0.0	12.1	12.7	6.8	12.3	8.6
借りるときの地蔵顔返すときの（閻魔）顔	3	24	6.7	3.4	3.6	2.7	12.3	5.6

老いたる馬は（道）を忘れず	3	25	1.7	5.2	0.0	2.7	10.5	3.9
鷹は飢えても（穂）を摘まず	3	25	0.0	1.7	1.8	0.0	7.0	2.0
我が物と思えば軽し（笠）の雪	3	24	0.0	0.0	0.0	0.0	10.5	2.0
蝸牛角上の（争い）	3	24	0.0	0.0	0.0	0.0	7.0	1.3
後の（雁）が先になる	3	25	0.0	0.0	0.0	0.0	3.5	0.7
麒麟も老いては（驚馬）におとる	3	25	0.0	0.0	0.0	0.0	3.5	0.7
何でも来いに（名人）なし	3	24	0.0	0.0	0.0	2.7	0.0	0.7
座して食らえば（山）も空し	3	24	0.0	0.0	0.0	1.4	1.8	0.7
居候（三杯目）にはそっと出し	4	17	0.0	5.2	3.6	18.9	61.4	17.8
売り家と唐様で書く（三代目）	4	16	0.0	0.0	0.0	2.7	12.3	3.0
相手変われど（主）変わらず	4	17	0.0	0.0	0.0	2.7	10.5	2.6
瓢箪で（鯨）を押さえる	4	17	0.0	3.4	0.0	4.1	3.5	2.3
紅は園生に植えても（隠れ）なし	4	16	0.0	0.0	3.6	0.0	5.3	1.6
朝題目に宵（念仏）	4	17	0.0	0.0	0.0	1.4	5.3	1.3
首振り三年（ころ）八年	4	16	3.3	0.0	0.0	0.0	1.8	1.0
自慢高慢（馬鹿）の内	4	17	1.7	0.0	0.0	0.0	1.8	0.7
尊い寺は（門）から知れる	4	16	0.0	0.0	0.0	0.0	3.5	0.7
生酔い（本性）違わず	4	17	0.0	0.0	0.0	0.0	1.8	0.3
薊の花もひと（盛り）	4	17	0.0	0.0	0.0	1.4	0.0	0.3
石部金吉（金兜）	4	16	0.0	0.0	0.0	0.0	1.8	0.3
脂に描き（氷）に鑲む	4	17	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
落ちれば同じ（谷川）の水	4	17	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
鯛も（一人）は旨からず	4	16	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

表5：調査項目別正答率【セットB】

ことわざ	L	度数	中学	高校	大学	～49	50～	全体
塵も積もれば（山）となる	1	42	98.3	100	100	97.8	96.7	98.5
泣き面に（蜂）	1	41	98.3	94.8	100	95.7	98.3	97.5
雨降って（地）固まる	1	41	98.3	91.4	92.3	97.8	95.0	94.9
井の中の（蛙）大海を知らず	1	41	91.5	94.8	92.3	91.3	96.7	93.5
海老で（鯛）を釣る	1	41	96.6	79.3	86.5	95.7	100	91.6
飛んで火に入る（夏）の虫	1	41	78.0	77.6	90.4	95.7	96.7	87.3
立つ鳥（跡）を濁さず	1	42	83.1	69.0	90.4	91.3	96.7	85.8
溺れる者は（藁）をもつかむ	1	41	72.9	72.4	88.5	93.5	100	85.1
三人寄れば（文殊）の知恵	1	42	84.7	63.8	82.7	93.5	91.7	82.9
壁に耳あり（障子）に目あり	1	42	78.0	67.2	84.6	93.5	90.0	82.2
好きこそ物の（上手）なれ	1	43	74.6	69.0	88.5	84.8	90.0	81.1
弱り目に（崇り）目	1	42	59.3	58.6	57.7	91.3	98.3	72.7
帯に短し（襷）に長し	1	43	55.9	44.8	46.2	89.1	100	66.9
藪をつついて（蛇）を出す	1	41	62.7	58.6	42.3	67.4	70.0	60.4
虻（蜂）取らず	1	42	69.5	46.6	44.2	52.2	71.7	57.5
嘘つきは（泥棒）の始まり	2	34	91.5	98.3	98.1	95.7	96.7	96.0
口も八丁（手）も八丁	2	33	44.1	29.3	48.1	91.3	98.3	61.5

人間万事塞翁が(馬)	2	34	57.6	41.4	67.3	67.4	60.0	58.2
火中の(栗)を拾う	2	34	47.5	37.9	42.3	73.9	80.0	56.0
貧乏(暇)なし	2	34	16.9	34.5	36.5	97.8	96.7	55.3
人事を尽くして(天命)を待つ	2	34	18.6	22.4	38.5	67.4	66.7	41.8
仏作って(魂)入れず	2	34	8.5	13.8	15.4	47.8	76.7	32.4
兄弟は(他人)の始まり	2	34	1.7	3.4	0.0	58.7	78.3	28.0
玉磨かざれば(光)なし	2	33	11.9	10.3	7.7	21.7	46.7	20.0
馬には乗って見よ(人)には添うて見よ	2	34	13.6	13.8	5.8	10.9	30.0	15.3
艱難汝を(玉)にす	2	33	1.7	3.4	0.0	6.5	23.3	7.3
下手の(考え)休むに似たり	2	34	3.4	5.2	5.8	6.5	11.7	6.5
引かれ者の(小唄)	2	34	3.4	1.7	1.9	0.0	10.0	3.6
木に縁りて(魚)を求む	2	34	1.7	0.0	3.8	0.0	6.7	2.5
怠け者の(節句)働き	2	33	0.0	0.0	0.0	2.2	0.0	0.4
腹が減っては(戦)ができぬ	3	25	96.6	100	96.2	100	96.7	97.8
すべての道は(ローマ)に通ず	3	24	10.2	19.0	36.5	37.0	58.3	32.0
すまじきものは(宮)仕え	3	25	3.4	27.6	13.5	32.6	65.0	28.7
思う念力(岩)をも通す	3	24	15.3	27.6	15.4	28.3	38.3	25.1
習わぬ(経)は読めぬ	3	25	20.3	15.5	15.4	28.3	45.0	25.1
日光を見ずして(結構)と言うな	3	24	1.7	5.2	0.0	19.6	46.7	14.9
株を守りて(兎)を待つ	3	25	5.1	17.2	23.1	6.5	10.0	12.4
鼎の(軽重)を問う	3	24	0.0	1.7	9.6	13.0	16.7	8.0
盗人を捕らえてみれば(我が子)なり	3	24	1.7	0.0	5.8	4.3	21.7	6.9
有為転変は世の(習い)	3	24	0.0	1.7	1.9	2.2	23.3	6.2
命長ければ(恥)多し	3	25	0.0	3.4	1.9	6.5	13.3	5.1
水は方円の(器)に従う	3	24	0.0	1.7	0.0	6.5	11.7	4.0
恋は(思案)の外	3	24	0.0	0.0	0.0	6.5	11.7	3.6
糟糠の妻は(堂)より下さず	3	25	0.0	0.0	0.0	4.3	3.3	1.5
毛を吹いて(疵)を求む	3	24	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
及ばぬ(鯉)の滝登り	4	16	55.9	63.8	40.4	47.8	56.7	53.5
牛の(角)を蜂が刺す	4	17	13.6	3.4	0.0	6.5	15.0	8.0
湯を沸かして(水)にする	4	17	6.8	3.4	5.8	4.3	5.0	5.1
選んで(粕)をつかむ	4	17	0.0	0.0	0.0	6.5	15.0	4.4
三遍回って(煙草)にしよ	4	17	6.8	0.0	0.0	4.3	3.3	2.9
平家を滅ぼすは(平家)	4	17	0.0	1.7	1.9	4.3	3.3	2.2
実の生る木は(花)から知れる	4	17	0.0	5.2	0.0	0.0	3.3	1.8
滄海変じて(桑田)となる	4	16	1.7	0.0	0.0	4.3	1.7	1.5
三人旅の一人(乞食)	4	16	1.7	0.0	1.9	0.0	1.7	1.1
皿嘗めた猫が(科)を負う	4	17	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7	0.4
心安いは(不和)のもと	4	17	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7	0.4
川立ちは(川)で果てる	4	17	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7	0.4
沙弥から(長老)にはなれぬ	4	16	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7	0.4
月日に(関守)なし	4	17	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
杓子は(耳掻き)にならず	4	17	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

この調査結果を見ると、レベル1では両セット共に15件中11件のことわざで全体の正答率が8割を超えており、それらについては世代差はほとんどない。新旧世代間で40ポイントを超える大きな差が見られるのは、セットAではわずかに「柳の下にいつも（泥鰌）はいない」の1件、セットBでは「弱り目に（祟り）目」「帯に短し（襷）に長し」の2件だけである。

レベル2では非常に大きな世代差が見られる。全体の正答率が8割を超えることわざがAセットに4件、Bセットに1件あり、それらについてはレベル1の場合と同様にさほど大きな世代差はない。しかし、全体の正答率がそれより低いことわざについては新旧世代間の差が大きいものが多い。Aセットでは「生みの親より（育て）の親」「鴨が（葱）を背負ってくる」「芸は（身）を助ける」「可愛さ余って憎さが（百倍）」「少年老い易く（学）成り難し」「生き馬の（目）を抜く」「鬼も十八（番茶）も出花」「李下に（冠）を正さず」「物言えは（唇）寒し秋の風」の9件、Bセットでは「口も八丁（手）も八丁」「火中の（粟）を拾う」「貧乏（暇）なし」「人事を尽くして（天命）を待つ」「仏作って（魂）入れず」「兄弟は（他人）の始まり」の6件において大きな世代差が見られる。

レベル3では全体正答率が8割を超えることわざはほとんどなく、わずかにBセットに「腹が減っては（戦）ができぬ」が1件含まれているだけである。一方、正答率1割以下のものがAセットで15件中10件、Bセットで8件ある。これらについては世代差はあまり大きくはないが、その中間に位置することわざでは大きな世代差が見られる。Aセットでは「勝負は（時）の運」「夫婦喧嘩は（犬）も食わぬ」「歯に（衣）着せぬ」「腹も（身）の内」「権兵衛が種まき（烏）がほじくる」の5件、Bセットでは「すべての道は（ローマ）に通ず」「すまじきものは（宮）仕え」「日光を見ずして（結構）と言うな」の3件のことわざにおいて40ポイント以上の正答率の差が見られる。

レベル4では、両セット共に15件中14件の全体正答率が1割以下であり、レベル1の場合とは異なる意味で世代差が現れない。例外的にAセットの「居候（三杯目）にはそっと出し」で大きな世代差が見られる。Bセットの「及ばぬ（鯉）の滝登り」で中高生の正答率が意外と思えるほどに高い。中高生の回答者は特定の1校だけに限られているので、何か特殊な事情が作用しているのかもしれない。

レベル別に平均正答率を求めた結果は次の表6のようである。

表6：レベル別平均正答率

レベル	セット	中学生	高校生	大学生	～49	50～	全体
1	A	80.0	79.5	78.8	80.4	90.1	81.7
	B	80.1	72.5	79.1	88.7	92.8	82.6
2	A	29.9	39.0	40.3	54.3	73.0	47.3
	B	21.5	21.0	24.7	43.2	52.1	32.5
3	A	8.0	12.8	12.2	21.4	32.7	17.4
	B	10.3	14.7	14.6	19.7	30.8	18.0
4	A	0.3	0.6	0.5	2.1	7.3	2.1
	B	5.8	5.2	3.3	5.2	7.5	5.4

この結果から、レベル1（PSリストの最上位）からレベル2（200位程度）、レベル3（500位程度）、レベル4（PSリストの1,000位程度）とレベルが下がるにつれて平均正答率も顕著に下降していることがわかる。このことから、前回の調査結果と同様、この種の調査においてPSリストが有効であることが再確認されたと言えよう。

世代差の観点から上の結果を分析すると、「若年層」（中学生、高校生、大学生）と「高年層」（50歳以上）の間で正答率の差が大きいのは、レベル2＞レベル3＞レベル1＞レベル4の順であることがわかる。レベル4では、両セットとも「高年層」の正答率が若干高いけれども、総じて数値が低く差は微小であり、このレベルのことわざは認知度の世代差の判定にほとんど影響しない。逆に、レベル1ではどの年齢層においても高い正答率を示しており、やはり両セットとも「高年層」の正答率が若干高いが、これも認知度の世代差の判定に大きく影響してはいない。総得点の差に影響しているのはレベル2とレベル3であることがわかる。今回の調査にはPSリストの有効性の検証という目的もあったために1,000位程度のことわざまで調査対象にしたが、単に認知度だけを調査するのであれば、PSリスト上位500件程度までに、あるいは100位～500位までぐらいに対象を絞ったほうが、年齢層間の認知度の違いが顕著に現れるものと考えられる。

セットの観点から表6の結果を見ると、レベル2を除けばセット間でほとんど差が見られない。したがって、この点でもPSリストの利用によるこの種の調査方法の有効性が確かめられたと判断される。レベル2におけるセット間の差は回答者の違いによるものと考えられるが、レベル2ではどの年齢層においてもセットAの方が顕著に平均正答率が高いことと、他のレベルではまったくそのような傾向が見られないことから判断して、やはり選択されたことわざの違いによるものと考えるのが妥当である。上で見たようにレベル2は世代差にも最も影響が大きく、認知度に最も敏感な部分であると考えられる。しかし、今回の調査で得られたレベル2におけるセット間の差はそれほど大きいものではなく、この種の調査におけるPSリストの有効性を危うくするものではない。上述のように調査対象を500位程度までに絞り各レベルの項目数を増やせば、このような選択

されたことわざの違いによる結果の変動は十分に小さくなるのではないと思われる。

年齢層の観点から見ると、年齢層が高くなるほどことわざがよく知られているという前回の調査結果が今回の調査でも裏付けられた。どのレベル、どのセットでも「高年齢層」（50歳以上）が最も高い正答率を示し、ほとんどの場合に「中年層」（49歳以下）がこれに次いでいる。平均正答数（満点60点）の形で結果を示すと次のようになる。

表7：年齢層別平均正答数

年齢層	セットA	セットB
中学生	17.7	17.6
高校生	19.8	17.0
大学生	19.8	18.3
～49	23.7	23.5
50～	30.5	27.5
全体	22.3	20.8

高年齢層が最もことわざを知っていることを端的に示しているのが、今回の調査での回答者579名中の最高得点者である。92歳の男性で得点は53点とことわざの専門家のレベルであった。経歴は明らかではない。回答はすべて漢字でなされておりルビまでふられていた。もちろん他の回答者と同じ時間的条件下で回答されている。

誤回答の中に、他のことわざや慣用句の混同によると思われるものはいくつか見られた。

鯛も〔腐って〕は旨からず < 腐っても鯛
 後の〔後悔／祭り〕が先に立つ < 後悔先に立たず／後の祭り
 瓢箪で〔こま〕を押さえる < 瓢箪からこま
 相手変われど〔所〕変わらず < 所変われば品変わる
 杓子は〔猫／定規〕にならず < 猫も杓子も／杓子定規
 下手の〔横好き〕休むに似たり < 下手の横好き
 目の上の〔かたき〕 < 目のかたき
 首振り三年〔柿〕八年 < 桃栗三年柿八年

後半部補充式回答法による前回の認知度調査においても見られたことであるが、若年齢層の誤答の中には、誤答であることを承知の上で書いたと思われるもののがかなりある。今回の調査でも、彼らのユーモア感覚、言葉遊び感覚を示す面白い例がかなりあった。

人の（噂）も七十五日：記憶／命／恨み／情け／我慢
 暖簾に（腕）押し：だめ／ごり／印
 柳の下にいつも（泥鰌）はいない：蛇／私／ゆうれい／ハエ／つる
 芸は（身）を助ける：宴会／私／財

少年老い易く（学）成り難し：おじさん／青年／仙人／老人
足下から（鳥）が立つ：火／けむり／竹の子／棒／角／きり／波／はら／ゆげ／うわさ／うじ
目の上の（瘤）：くま
李下に（冠）を正さず：実験／えり／背筋／孔子
生き馬の（目）を抜く：背骨／たてがみ／肝／毛／血
物言えば（唇）寒し秋の風：きつと／目線が／心／すでに／ふところ／齒
羹に懲りて（膾）を吹く：ほら／風／笛／息／口笛
後の（雁）が先になる：しまつ／人
老いたる馬は（道）を忘れず：優先席／年／足跡／過去／我／初心／恩
麒麟も老いては（驚馬）におとる：ASAHI／オレ／象／ねずみ／猫
何でも来いに（名人）なし：容赦／来る者／まった／不覚／二言／拒否／憂い／何も／敵／こ
わいもの
我が物と思えば軽し（笠）の雪：さらさら／津軽／屋根／四月／肩
借りるときの地蔵顔返すときの（閻魔）顔：まじめ／おこり／真／鬼／朝／夕／悪魔
勝負は（時）の運：判断／自分／バッテリー／風
夫婦喧嘩は（犬）も食わぬ：ごはん
自慢高慢（馬鹿）の内：丸／実力
生酔い（本性）違わず：妻
相手変われど（主）変わらず：対応／態度
首振り三年（ころ）八年：うなずき／足振り／腰振り
鯛も（一人）は旨からず：中国産／たいやき／養殖／骨／内臓／尾／目玉／頭
溺れる者は（藁）をもつかむ：髪／魚
火中の（栗）を拾う：石／宝石／まき
兄弟は（他人）の始まり：喧嘩／嘘つき／友／社会
人事を尽くして（天命）を待つ：幸福／礼／朗報／栄光
馬には乗って見よ（人）には添うて見よ：母／女／勧誘／しか／子供
貧乏（暇）なし：損／一文／金／ばか／得／なくすもの
仏作って（魂）入れず：鬼／目／仏壇／金さいせん
玉磨かざれば（光）なし：宝石／報酬
怠け者の（節句）働き：無駄／ただ／とも／正月／蟻／下
すまじきものは（宮）仕え：親
株を守りて（兎）を待つ：金／年初来高値／収入／たぬき／ストップ高
習わぬ（経）は読めぬ：字／漢字／言葉
腹が減っては（戦）ができぬ：仕事
命長ければ（恥）多し：難／苦難／ミス／困難／幸
すべての道は（ローマ）に通ず：京／死／自分／未来／王道／長安／己／天竺
盗人を捕らえてみれば（我が子）なり：金／いい人／警官／善人／無罪／だんな／妻
日光を見ずして（結構）と言うな：明るい／アホ／光合成／太陽／まぶしい／光／昼／月光
毛を吹いて（疵）を求む：孫悟空／助け
恋は（思案）の外：もって／思い／法／門前
三遍回って（煙草）にしよ：わん／休憩／休み／あと
選んで（粕）をつかむ：ハート
平家を滅ぼすは（平家）：源氏／兵／まことなり／おごり

三人旅の一人（乞食）：飯／歩き／よがり／迷子／息子／道連れ
 滄海変じて（桑田）となる：基地

4. ことわざに関する意識調査の結果

ことわざの認知度調査と同時に、ことわざ一般に関する意識調査を7項目にわたって行った。その結果を簡単に述べておく。

1. ことわざに興味がありますか。
- | | |
|-------------|------------|
| 1. 大変興味がある | 2. 多少興味がある |
| 3. あまり興味がない | 4. 全然興味がない |

表8：設問1に対する回答結果（内の数字は百分比を表す；以下同じ）

	1	2	3	4	無回答
中学生	10 (8.4)	48 (40.3)	49 (41.2)	12 (10.1)	0 (0.0)
高校生	9 (7.8)	42 (36.2)	44 (37.9)	21 (18.1)	0 (0.0)
大学生	4 (3.7)	49 (45.8)	46 (43.0)	8 (7.5)	0 (0.0)
49歳以下	11 (9.2)	60 (50.0)	35 (29.2)	14 (11.7)	0 (0.0)
50歳以上	13 (11.1)	63 (53.8)	39 (33.3)	1 (0.9)	1 (0.9)
全体	47 (8.1)	262 (45.3)	213 (36.8)	56 (9.7)	1 (0.2)

予想通り、年齢層が上がるほど「興味がある」という回答が多くなっている。しかし、その差はさほど大きくはなく、中高生の半数近くが「興味がある」と回答していることが、むしろ意外な感じがするほどである。

2. ことわざをよく使いますか。
- | | |
|------------|-----------|
| 1. よく使う | 2. ときどき使う |
| 3. あまり使わない | 4. 全然使わない |

表9：設問2に対する回答結果

	1	2	3	4
中学生	6 (5.0)	32 (26.9)	54 (45.4)	27 (22.7)
高校生	7 (6.0)	28 (24.1)	51 (44.0)	30 (25.9)
大学生	0 (0.0)	19 (17.8)	55 (51.4)	33 (30.8)
49歳以下	4 (3.3)	38 (31.7)	56 (46.7)	22 (18.3)
50歳以上	4 (3.4)	42 (35.9)	66 (56.4)	5 (4.3)
全体	21 (3.6)	159 (27.5)	282 (48.7)	117 (20.2)

ことわざは一般に年配者がよく使うと言われるが、調査の結果からもそれがうかがえ

る。しかし、若年層の中で見ると「大学生」に比べて「中学生」「高校生」の数値が目立って高い。大学生で「よく使う」と回答した者はなかったのに対して、「中学生」「高校生」ではそれぞれ6名、7名もあった。中学生がことわざをよく使うということは想像しにくいので、特殊な事情が作用していると考えられる。調査の概要で述べたように、「中学生」「高校生」の回答者はそれぞれ1校に依頼したのであるが、両校は同じ大学の付属校であり、学生の多くは6年間一貫教育を受けている。おそらく、この中学、高校では国語の授業でことわざが積極的に取り上げられているのではないかと考えられる。

「大学生」の回答者にはそのような事情がないので、「大学生」の結果が「若年層」の一般的傾向を最も忠実に反映していると思われる。

3. ことわざをよく耳にしますか。

- | | |
|------------|-----------|
| 1. よく聞く | 2. ときどき聞く |
| 3. あまり聞かない | 4. 全然聞かない |

表 10：設問 3 に対する回答結果

	1	2	3	4	無回答
中学生	18 (15.1)	54 (45.4)	34 (28.6)	13 (10.9)	0 (0.0)
高校生	8 (6.9)	52 (44.8)	45 (38.8)	11 (9.5)	0 (0.0)
大学生	3 (2.8)	51 (47.7)	50 (46.7)	3 (2.8)	0 (0.0)
49歳以下	5 (4.2)	57 (47.5)	49 (40.8)	8 (6.7)	1 (0.8)
50歳以上	8 (6.8)	69 (59.0)	37 (31.6)	2 (1.7)	1 (0.9)
全体	42 (7.3)	283 (48.9)	215 (37.1)	37 (6.4)	2 (0.3)

この結果にも「中学生」の回答状況の「異常さ」が現れている。「よく聞く」という回答が18名と他の年齢層に比べてかなり多く、「高年齢層」よりも多くなっている。やはり、特殊事情が作用していることをうかがわせる。

4. ことわざをどこで見たり聞いたりしますか。(複数回答可)

- | | |
|---------------|------------|
| 1. 本で | 2. テレビで |
| 3. 新聞で | 4. 家族との会話で |
| 5. 友人や同僚との会話で | 6. 授業で |
| 7. その他(具体的に) | |

高くなること、高年層では日韓差はほとんど見られないが、若年層では日本より韓国の方がことわざの認知度が高い、という推測を再検証したい。

今回の調査では一語補充式回答法という形式を採用したが、この方法でことわざの認知度、つまりことわざを知っているかどうかを測ることができるかと言われれば、正確に測ることはできないと答えざるを得ない。前回の調査で採用した後半部補充式回答法についても指摘したことであるが、ことわざの表現面だけを問う調査法であり、意味が理解されているかどうかについてはまったく問題にしていない。したがって、本当の意味でのことわざの知識を知ることができないことは確かである。しかし、前回の調査に関する考察で述べたように²⁾、ことわざの認知度を調査するにはさまざまな方法がある。与えられたことわざの意味を直接問う方法、ことわざの意味を選択させる方法、与えられた意味や文脈に合うことわざを答えさせる方法、ことわざの用例を作らせる方法、前回の調査で用いた後半部補充式回答法や今回の調査で用いた一語補充式回答法などが考えられ実施されてきた。³⁾ それらの方法には一長一短があり、どれを選択するかは、調査目的や調査の条件によって決められる。特定のことわざに関する知識を調査するためには意味を度外視することはできないが、ことわざの総体的知識の量を比較的簡便な方法によって測るためには、表現面だけに着目した後半部補充式回答法や一語補充式回答法のほうが適している。今回の調査で一語補充式回答法を採用した理由については本稿の冒頭で述べた。そのような条件化で考えられる方法の1つとして試みたのであって、それがことわざの認知度を知るための唯一絶対の方法であると考えているわけではない。今後、他に有効な方法がないかということも検討課題としたい。

ことわざに関する意識調査の分析で繰り返し述べたように、「中学生」「高校生」の回答者を特定の1校に限ったために「特殊事情」が結果に色濃く反映されている可能性が高い。それは認知度の測定結果にもある程度影響していると考えられる。つまり、平均的な中高生よりも認知度が高くなっている可能性がある。したがって、韓国の調査結果と比較するためには、「中学生」「高校生」については回答者を替えて再調査をする必要があるかもしれない。

しかし、調査の不備と解釈される「特殊事情」も、違った観点から見れば、ことわざに関する興味深い事実を示唆していると考えられる。「特殊事情」の背景となっていることわざ教育がどの程度のものであったかは把握していないが、国語教師の努力次第でことわざに対する学生の意識にかなり大きな変化が生じることが示唆されているのである。時代の急激な変化によって、ことわざに込められた価値観が古臭いものと感じられ若い世代の急激なことわざ離れが起こっていると言われる。しかし、ことわざに込められた教訓や知恵の大部分は現在においても十分に通用するものであり、また、そのような価値観が失われつつあるからこそ大切にすべきものも多い。単なる時代の変化

としてことわざの衰退を傍観するのではなく、国語教育におけるちょっとした努力でことわざへの愛着や親近感を回復することができるという期待感を抱かせるのである。

註

- 1) 本稿は、2008年11月15日に明治大学で開催された「ことわざ学会」の第20回フォーラムで発表した内容に加筆修正したものである。
- 2) 鄭芝淑(2007)を参照。
- 3) 松岡武(1986)、丸田実・福田滋美・石野博史(1993a、1993b)などを参照。

引用文献

- 鄭芝淑(2005)「日本と韓国のことわざ認知度—ことわざスペクトル・リストに基づく調査」『多元文化』第5号、名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、pp.241-252
- (2007)『日本と韓国のことわざの比較研究—ことわざスペクトルと比較ことわざ学—』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文)
- 松岡武(1986)「「ことわざ」に関する調査結果から見た現代若者像」『山梨大学教育学部研究報告』第37号、pp.122-130
- 丸田実・福田滋美・石野博史(1993a)「第7回言語環境調査から(1)ことわざは現代人にどのように受け入れられているか」『放送研究と調査』6月号、NHK放送文化研究所、pp.40-49
- (1993b)「第7回言語環境調査から(2)ことわざ・成句の形と意味のゆれ」『放送研究と調査』7月号、NHK放送文化研究所、pp.34-43